



Title	アカエゾマツの育苗方法について
Author(s)	二階堂, 利夫
Citation	北海道大学演習林試験年報, 2, 95-97
Issue Date	1985-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72639
Type	departmental bulletin paper
File Information	1983_2-13.pdf



II-13 アカエゾマツの育苗方法について

二 階 堂 利 夫

はじめに

昭和42年に育種試験場が開設された当時から今日まで育苗に従事して来た経験をもとに、アカエゾマツの育苗方法についてとりまとめたので報告する。アカエゾマツの育苗では、種子の播種年を1年目とすれば、2年目は播種据置、3年目に第1回目の床替、4年目に床替据置、5年目には第2回目の床替となり、6年目の秋には山出しとなるが、大きさでは苗長30cmが一つの基準になっている。その過程においては、天候になやまされることが多く、天候さえ調整できればよいと常々思っている。

1. 種子の採取

種子採取には優良な林分が採種林として指定され、ここから継続して採取を行っている。遅くなれば種子が飛散し、早ければ未熟であるので採取時期は9月15日以降10月初めまでと定められている。採取すべきか否かは球果のなり具合で決定され、たとえ多くなっている場合でも実入りが悪い場合もあり、10%以上の充実粒があればよいとされている。また、種子の結実には豊凶があり、凶作の年の種子は品質も悪くシイナが多いので採取しない。そのため凶作が続けば貯蔵量も底をつきかねない。採取方法としては直接もぎ取り、樹を傷めないようにしている。ヘルメットをかぶり命綱を身につけ、縄または1本ハシゴを使い枝のあるところまで登り、球果は樹の先端から5m程までに多くついているのでその後は枝を利用して登る。なお、登る時球果を入れる袋と2m程の針金を携帯するが、針金は手の届かない枝を自分の手元に引き寄せるために使う。

2 球果の乾燥・精選

一般に屋外乾燥がよく、約1週間も乾燥すると自然に脱粒する。その後フルイにかけるとほとんど全粒と言ってよいほど脱粒する。その種子を2〜3日乾燥させて精選を行い、種子にハネのたくさんついている場合は多少手でもむ。ハネが落ちたところで目の細かいフルイにかけると、なおハネのある時はもう一度乾燥をしてから手によってもむ、その後風選（唐箕）をかけた後に大形のヤニ等を除去してでき上がる。精選率は唐箕のかけかたでかわり技術を要する作業である。

3. 種子の貯蔵

出来上がった種子は、種子量の約5〜7%の乾燥剤（シリカゲル）と^菌害種の発生を抑制する硫加カリウムを入れ、プレハブ冷蔵庫に−5℃で貯蔵する。乾燥剤等は1年に2回入替を行う。種子の貯蔵は当初5〜6年と言われていたが、この繰り返により10年を経た今日でも発芽率の低下は見られない。

4. 播種時期と播種量

アカエゾマツは播種後約3週間で発芽する。当場では春播としているが、これに対し秋播の場合融雪期の土壤の滞水により、発芽率が低下するので望ましくない。また10月20日以前は発芽のおそれが大きいため注意を要する。なお播種量は1㎡あたり17gである。

5. 耕耘、床作り、播種

トラクターにプラオをつけ耕耘、ロータリーにより細土、床上機による床上を行った後に堆肥(㎡当り^約3kg)を均一に敷き詰め板で固める。また土壌条件の良好な土地では耕耘前にばらまく方法もある。でき上った堆肥の上に砂土を堆肥の見えない程度にかける。次にローラ(120kg程度)で固める。場合によっては二度がけする。その時の床の堅さが発芽に大きな影響を与える。その後床の上に魚粕または油粕(㎡当り50g)を均一に施しその上に種子を播く。種子は殺菌消毒(チユウラム)したものを両側から何回にも分けて均一に播く。終ったらただちに種子が見えかくれする程度に覆土を行う。覆土は発芽に大きな影響をおよぼすので十分な注意が必要である。覆土の終わったところから順にシキワラをかける。シキワラは種子の流失・乾燥・凍上・土寄せを防ぐ効果が大である。その後床板で枠をして防雀網をかけ完了する。散水、除草等も適宜行い、降雪前には雪腐れ予防としてチユウラムを1㎡当り7g散布するが、2週間経過しても降雪のない時は何回も散布しなければならない。

6. 播種据置

追肥は年4回状況を見ながら適宜行う。晴天が長期にわたる場合、追肥の効果は現われにくい。ため多量に追肥しがちである。降雨後一気に効くことから追肥には注意が必要である。病害としては立枯病に注意するとともに、罹った場合でもすみやかに殺菌剤(チユウラム)を水に溶かし、多めに散布する。除草、散水、間引き等も随時行う。

7. 床替

床替えは、事業の目的にかなった適当な大きさの健全な活着のよい苗木をつくるために行う。床替床は、耕耘前に堆肥、石灰を散布してトラクターによる耕耘等を行うが、その後は播種床の作り方とほぼ同じである。掘取はトラクターに根切機をつけ根浮しを行い引き抜く。乾燥を防ぐため寒冷紗をかける。場合により十分散水した後に行うと細根も切れず掘取できる。選苗は前年の成績調査に基づき基準高を決めて選び、ポリ容器に入れて運搬する。植付は専用の定規を使い1回床替では81本植(9本×9本/㎡)2回床替では36本(6本×6本/㎡)になる。追肥はそれぞれの基準にしたがって与える。その他乾燥・晩霜害に注意し、アブラムシ、ハダニが発生したときは殺虫剤(キルパール、エカチン)で防除する。除草散水は状況を判断し適宜行う。

8. 床替据置

細根の発達をよくするために、5月上旬に根切を行う。また山出に備え根切をして土用芽(二次成長)を防がなければならない。根切はトラクターに根切機をつけ引っ張る。浅いと大事な根を切ることになる。また、深いと根切の効果はない。除草、消毒等は床替同様にを行う。

9 山出

以前は春山出をしていたが、床替に専念できないこと、春先の乾燥により苗木が弱ること、また名寄と山元の雪解け時期の違いなどから芽ぶきした苗木を山出しなければならなかったことなどにより、最近ではほとんど秋山出になった。山出する時は決められた基準（30cm）に達したものを掘取選苗し200本～300本の苗木をシートで梱包して山出する。

おわりに

一応種子採取も含め播種から山出しまでの一環した作業について説明した。このように苗木生産は6年以上という長い年月を要し、天候の不順や一寸とした不手際が直接苗木生産に影響するため根気と注意力を必要とする仕事である。現在の限られた予算、少ない人員のもとでの苗木生産には様々な問題があるが、これからも各林の御協力をお願いしたい。